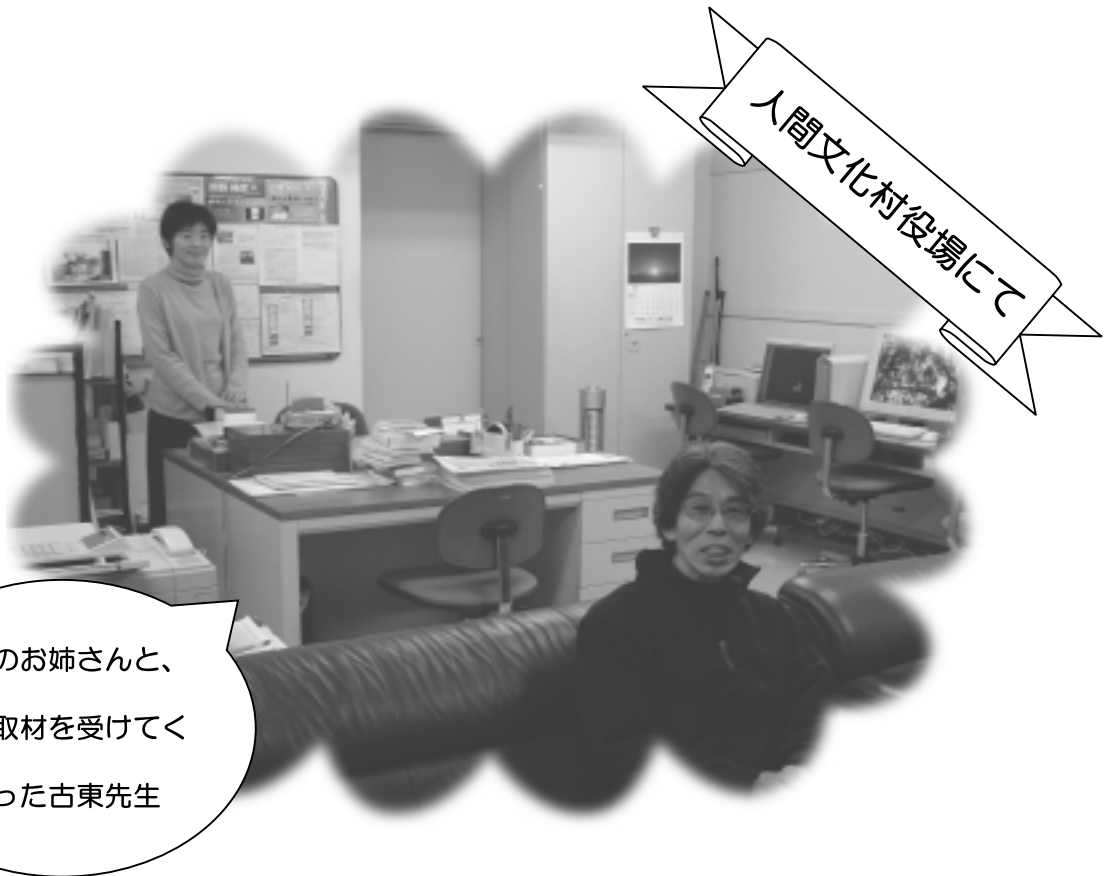


☆人間文化研究会インタビュー☆ ～人間文化村～



事務のお姉さんと、
今回取材を受けてく
ださった古東先生

○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*

忙しい現代社会……

走り回るだけではなく、たまには一息ついてみませんか？

忘れられがちな「スロー」という概念

それをふと思い出させてくれる村に、取材に行ってきました

○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*○*

◇「人間文化村」ができたきっかけ

きっかけは実に簡単です。せっかく縁あって学生さんと僕ら教師や職員さんが、奇しくも出会いがあったわけじゃないですか。なのに、ただの教育機関の中での関係性だけで終わるのはなにか嘘っぽい、つまり単位をとるだけの学校生活の上のお付き合いをするだけでは、口惜しいし、「人間らしく」ない。せっかく出会ったんだから、こころ通わせ、朋に楽しく生活したい。それが人間文化村発案の動機です。

そういう生活の場を、学校のカリキュラムとしてだけじゃなく、皆のこころ通い合うコミュニティ（共同体）として形作ってみたいなあということ、学部生さんや院生さんと、それから関連する教職員とで一緒に作りました。

実はもうすでに二十年前から、同様の活動はしてきました。以前は「比較文化村（比較文化研究会）」と申しました。東千田にキャンパスがあった時から続いています。総科が出来た時からある組織なんですよ。

その後、大学の組織がいろいろと変わり、人間文化プログラムができたことをきっかけに、昨年度から「人間文化村」という名前にいたしました。

現在、人間文化村民（人間文化研究会員）は七十名ほどです。人間文化プログラム以外の人も、希望すれば誰でも入れます。自主編成プログラム生も四名いるんです。それから、少ないですけど文学部の学生さんや先生もいます。また、東千田キャンパスの院生さんもおられます。

◇活動

特定の活動日があるわけではありませんが、基本的には金曜日の午後四時ぐらいからです。三々五々やってきて、読書会をしたり、映画会を催したり、講演会の準備をしたりしています。何もない日も、「和菓子を食べる会」を開いて、たのしい四方山話に花を咲かせております。まるで田舎の昼下がり、縁側でひなたぼっこしながら井戸端会議に笑いが弾け飛ぶような感じですね（笑）。

活動内容の基本は、人間の五感に訴えるような活動です。五感とは言うまでもなく、聴く、見る、味わう、触れる、嗅ぎ分ける、ということですよ。

「聴く」はむろん主に音楽です。それから名著古典を読む「読書会」もありますし、「百美巡礼」があります。「百美巡礼」は毎月一回くらいのペースで、芸術系の先生

方が引率して美術館や名所旧跡や、あるいは風光明媚な山野を巡ります。芸術系の先生方の「顔」がありますので、美術館の入場料は無料になります。交通費は必要ですが（笑）。

その他に「味わう」ということでは、「カフェ・ドウ・シネマ」を開催しています。埋もれた名画を上演しながら、美味しい珈琲をいただきつつ、映画を深く味わうとともに、人と人とが深くふれあう。そんな催しも行っております。



今回取材を受けてくださった、文化村事務長の古東先生。



村の集会所。上映会もここで行われる。

それから研究合宿が夏休みにあります。それは一泊二日の合宿旅行です。昨年度は宮島でした。今年度は大山へ行こうと思っています。

A棟五階のA504室が、人間文化村の集会所です。むろん、いつもいつもそこにいるわけではなく、あるときは七階のゼミの先生の所でたむろしたり、同じプログラムの人や、大学院生の人などと話をしたり、いろんな形でいろんな場で活動しております。

◇「味わう」こと——カフェ・ドゥ・シネマ

映画は日本映画に留まりません。この前は大島渚の映画でしたが。

映画上映をするにあたり案内係が二人います。一人はもう四年生で、映画を研究しています。それから佐藤さんという、もともと広告企画をやっていた方です。この方はほとんどプロの方で、いろんなイベントをなさってこられました。

映画上映会では、普通の映画館やホームライブラリで上映するようなのをここではやりません。ちよつと普通では目にしないような、一般的に見ようと思っても見られないような映画——すぐく有名だけでも一般受けしないので、映画館でなかなか上演されないような監督の映画——を上映しています。

◇「見る」こと——ハレハレ・芸術・日和

芸術は美術館だけではなく町にもあります。だから、路上観察みたいに広島市内の路地裏や川べり、お寺や街道、それから遺跡など、そういうところに出かけています。村民全員が集団で動くことはありません。そんな集団が市内を歩いていたら、気色悪いじゃないですか（笑）。村の中でもそれぞれ気の合う者同士のグループが、

三々五々、いろんな活動をしています。

一堂に会するのは研究合宿や、研究会、追いコン、そして新歓コンパなど、そういうときです。

◇「読む」こと——読書会

読書会は、ただ集まって黙々と本を読むものではありません。それぞれ得意分野がありますから、その得意分野で読んだ人が感想を言って、それを話のきっかけにしながらいろいろ議論をします。でも結局は、議論をすることが目的ではなく、です。最後はここところが触れ合うこと。いのちとのちとが通い合うこと。たましいとたましいとが共鳴をし始めること。だからまさにコミュニケーションこそが目的なんです。

学校に来て、授業に出て、はいさよなら、ではなく、かといって運動系や文科系のサークルみたいにリジッドな集団活動でもなく、もうちよつと自由に気楽で縦横無尽な活動形態——だから村なんです——、でも温かくのんびり心とませることができような、まるで一家団欒の場所や家族のような関係性を、この人間文化村では求めております。

◇根本にあるもの——三つのスロー

人間文化では、哲学や、宗教、芸術、それから文学などを勉強します。芸術や文学や哲学や宗教といえ、文化の中の文化じゃないですか。それを勉強する上では、是非「スロー」ということを学んでもらいたいです。

自然の世界ってスローじゃないですか。植物はすぐには育たない。種をまいて、半年かけて花が咲いて……。せみは鳴くのが七日間だけど、土の中に七年間いますしね。

本当のものが、もし自然なものだとすると、本当のものに迫ろうとしたら、ゆったりとした時間が必要だということです。つまり、本物の文化が育ち花咲くにはスローな時が必要ってことです。スロータイムということを前提としてやらないと、きちんとした文化は育たないし、文化ってことを理解もできませんし、実践することも不可能です。

だから、人間文化プログラムに欠かせないモットーが、「スロー」なんです。スローというのは、ドンくさいけれど正々堂々とゆっくりと歩んでいく、そういう生き方でもあります。

象徴的にいえばスローフードですね。食

べ物も文化の一形態ですが、スローフードこそ本当に料理らしいし、滋養に満ち、美味しいですよ。ファーストフードに対する、そんなスローフードが典型的に教えてくれるように、「スロー」というのは、人生を本当に味わうということに繋がります。

普段はつまらないと思ってるかもしれないですが、人生って実はそれ自体でとてもおいしいんです、生きてるってこと自体がご馳走なんです。そのことをイタリア人は「ラ・ヴィータ・エ・ベラ (the life is beautiful)」と申します。慌ただしい現代社会は、なかなかそんな風に人生そのものを「味わうこと」を許さないですし、そういう機会は非常に少ないように仕組みられています。

そういう現代社会の中で、大学もまた、どんどん自由がなくなって「スロー」を許さなくなってきました。ファーストフードさながらに、即効性とか分かりやすい成果だとかをすぐに求めてきます。それをなんとかしたい。「ファースト」では文化も学問も精神性も思想も文学も芸術も育たない。むしろ、何より「人間」が育たない。「人材」は育っても「人間」が育たない。そんなことも念頭にあって人間文化村を作った

ということもありますね、実は(笑)。

スロータイム、スローフード、スローライフ。スローの人生観があれば、いつでもそこに帰っていきます。そのためにこの村を皆さんに活用して欲しいと思います。

担当 18生 伊東 遥

小野 未千恵

